

# 「代わり」

—初稿—

2024/5/31

脚本 太郎

〈人物表〉

雲井嵐	(15)	雲井家長男。嵐の兄。
雲井凧	(15)	嵐の妹。火事で死亡する。
雲井風花	(38)	嵐と凧の母。凧を溺愛している。
警察官 <sup>▽</sup>	(35)	

ログライン

母親から死んだ妹の格好をすることを強要されていた雲井嵐が、それに歯向かうも、結局は力で抑え込まれてしまう。

ねらい

修羅場つばいシーンを書く。

1. 雲井宅・全景（夜）

雲井宅（一軒家）が激しく燃えている。  
家の前には消防車と救急車。やじうまが周囲を囲んで  
いる。

担架に乗った雲井嵐（15）が救急隊員たちによつ  
て救急車に担ぎ込まれようとしている。

雲井風花（38）がやじうまをかき分けて救急車の  
方に駆ける。

風花 「嵐……嵐っ！」

嵐が嵐の前に到達する。

風花、絶望したような表情。

風花 「嵐……」

嵐 「母さん……」

嵐、風花を見上げる。

風花 「嵐は……嵐はどこ？」

嵐 「ごめん……」

嵐、申し訳なきように燃える家を見る。

風花 「嘘……」

風花、その場にへたり込む。

2. アパート・雲井家の部屋・リビング（朝）

テーブルについて朝食の食パンを食べている嵐。

女性用のウィッグと衣服類を持って部屋に入つてく  
る風花。

不審そうに風花を見る嵐。

風花 「ねえ、嵐」

風花、嵐に女性用のウィッグを渡す。

風花 「そのウィッグ、被ってみて」

困惑しながらも嵐が被ると、次は女性ものの洋服を  
渡される。

嵐 「ちょっと……何？ どういうこと？」

風花 「いいから。着てみなさい」

有無を言わせぬ表情と口調に気圧され、着替える嵐。

一転、にこやかな表情になる風花。

風花「やっぱり似合うじゃない！ 凧にそっくり……さすがは兄

妹ね！」

溜まらないといったように嵐を抱きしめる風花。しばらくそうした後離れる。

嵐「ね、ねえ……もういい？ 取るよ？」

ウィツグを外そうとした嵐の手を押さえつける風花。

嵐「ああ、さん……？」

数秒、風花が無表情に嵐の目を見つめる。その間両者沈黙。

風花「ねえ、凧。久しぶりに、お母さんと一緒にお買い物行きま

しょうか？」

### 3. アパート・雲井家の部屋・リビング・仏壇前（昼）

仏壇に置かれた雲井凧（14）の遺影がゆっくりフ

ェードアウト。

嵐の遺影がフェードイン。

### 4. アパート・雲井家の部屋・リビング・仏壇前（朝）

風花が仏壇に線香をあげているところで、凧の格好をした嵐が部屋に入ってくる。

風花が振り向き、笑う。

風花「おはよう、凧。今日は嵐の命日ね」

嵐、無表情。

×××

仏壇に手を合わせている嵐と風花。

風花「ごめんね、お母さん、最期に一緒にいてあげられなくて」

嵐が手を戻し、風花を睨む。

風花「本当にひどい火事だったわよね。嵐のことは本当に残念だったわ。でも……」

風花、手を戻して振り返り、嵐に笑いかける。

風花「あなただけでも助かって、本当に良かったわ……凧」

嵐「ねえ、母さん。もうやめようよ」

風花「え？」

嵐「凧は死んだんだよ」

風花「何を、言ってるの？」

嵐「火事で死んだのは凧じゃない……凧だ。ぼくはママさんが大好

きな凧じゃない。長男の凧の方なんだよ！」

風花「い、意味が分からないわ……凧だったら、突然何を——」

嵐「凧じゃねえつつつてんだろうが！」

嵐が思いつきり壁を殴る。

風花「きやあつ！？ お、落ち着いて！ ご近所迷惑だから、そ

んなに大きな声出さないで！」

嵐、少し息を整えた後、話を再開する。

嵐「ママさんがどれだけ、ぼくより凧の方が大事だったにしろ、

そんな想い現実の前では何の価値もないんだよ！ 凧

が死んだのは事実なんだ！ 変えられないんだ！」

風花「な、凧……」

嵐「だから凧じゃねえつてんだよ！ アンタ母親だろ？ 頼むか

らもつとしっかりしてくれよ！」

嵐、ウィッグを脱ぎ、床に叩き付ける。

風花「やめてー！」

嵐「うるさい、よく見ろよ！」

風花に顔を近づける嵐。

嵐「ほら……ママさん、この顔が本当に凧に見えるの？ ねえ

！」

風花「いや……お願いやめて……」

目を瞑り、嵐の顔から目を背ける風花。

嵐「ほら、目を逸らしてないでしっかり見てよママさん。ぼく

の顔をさあ！」

耳を塞ぎ身をかめる風花。

風花「やだやだやだやだやだ見たくない聞きたくないやだや

だやだやだやだやだ——」

嵐「ねえつてば！ これが本当に凧に顔に見え——」

風花「嫌だつてつて言ってるのよ！」

風花に首を物凄い勢いで掴みかかれ、壁に背を

打ち付ける嵐。

風花の手を嵐の手が握り返すが、離れない。

嵐は息を詰まらせ、直後にせき込む。

風花「あああああああああああああああしいいいいいいいいいいいッ！」

嵐「……かあ、さ——」

風花「偉っそうに説教してんじやないわよ親に向かって——！」

風花の嵐の首を絞める力が強まる。

風花「元はと言えばアンタのせいじゃない！ アンタが風を置いて逃げたから……アンタがもつとしっかりしてればこんなことにならなかったんだ！」

嵐の目が一段と見開かれる。

風花「お前が風を殺したんだ。全部お前のせいなんだ死んで詫びろ。死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」

風花の手を掴んでいた嵐の手から力が抜け、グツタリと垂れ下がる。気絶したわけではない。

風花の手の力が弱まることはない。

×××

嵐は呆然と立ち尽くしている。その頭には無造作にウィッグが載せられている。

風花はキッチンに向かってゆっくりと歩く。その足取りはヨタヨタと、どこか覚束ない。

風花「さて、と。もうこんな時間だし、朝ご飯の用意しちゃうわね……風？」

風花、笑顔。

## 5. アパート・全景（昼）

アパートの前にはパトカーが複数台停まっている。

## 6. アパート・雲井家の部屋の玄関前・（朝）

数人の警察官がいる。

警察官Aが呼び鈴を押す。

警察官A「雲井さん、いらっしやいますか？ ご近所から異臭がするとの通報がありました」

数秒待っても返事がない。

警察官 $\Delta$ がドアノブをガチャガチャすると、鍵が掛かっているように、ゆっくりとドアが開く。漂っていた異臭がより一層強くなり、全員思わず鼻に手を当てる。

家の中に踏み込む警察官数人。

## 7. アパート・雲井家の部屋・リビング(昼)

嵐は嵐の格好をさせられたまま縛られ、口には何か食べ物が押し込まれていた。

風花はキッチンで料理をしているようだが、その食材はすでに腐敗している。彼女の目の焦点は合っておらず、何か独り言を絶え間なく繰り返している。警察官数人がその光景を見て啞然とする。

終